日本ワイルド協会第 50 回記念大会要旨

【特別講演】

## 吉田健一とワイルド――近代と世紀末デカダンス

富士川 義之（元東京大学教授・日本ワイルド協会顧問）

吉田健一は『英国の近代文学』巻頭の「ワイルド」論を「英国では、近代はワイルドから始る」と書き出している。刊行当時から評判になった書き出しだが、それにしてもなぜワイルドからなのか。筆者は６０年代半ばごろから吉田の著作に親しむようになり、それなりに影響を受けたものだが、ワイルドを英国の近代文学の始祖とみなすという吉田の批評家・英文学者としての大胆な立場表明には正直大層意表をつかれるとともに切れ味の鋭い文学的感性と知性の輝きを感じさせられて、その独特なワイルド論は筆者にはとても魅力的であった。吉田の言う「近代文学」というのはどうやら２０世紀英国のモダニズム文学を指していることに後に気づくのだが、彼がなぜそのような型破りな揚言を行うのかを知るためには、彼がそもそも近代や世紀末をどのように捉えているかを再検討することが不可欠である。これがなかなかの難事であることは言うまでもなかろう。難事ではあるが、挑むに値する大きなテーマでもある。ペイターやイェイツ、さらにはカーモードの名著『終りの意識』なども引き合いに出しながら、講演では検討してみたいと思っている。